

桜蔭俳話会 七月例会（第二九七回） 秀句鑑賞

バス灼くる次ぎは靖国神社前 貞勝

「終戦忌」、「終戦日」の句の別の作り方であろう。真夏の日盛りに乗車したバスは、車体が熱く灼けているという事実を提示しているだけである。しかし、バスの運転手が「次は靖国神社前」とアナウンスすることによって、終戦の日のイメージが読み手に鮮烈に浮かび上がってくるのである。

控へめの扇子の風や琵琶響く 友子

「控へめの扇子の風」の発見が良い。控え目の扇子の風は、控え目の扇子の音に通ずるから、下五の「琵琶響く」とでは、「音響」と言う点で重なる。音の大小の対比と見られ易いので、演奏されている琵琶の曲名あるいは、「平家琵琶」と置いた方が良い。

所作の美し涼のあつまる能舞台 幸

能の美しい所作に「涼」を感じ、能舞台に涼が集まっているとの把握が良い。能舞台、演者、音の全てが作者に心地よく、そこに涼しさを感じたのであろう。

片陰を拾ひ老猫去りにけり 秀一

「老猫」は少し狙い過ぎかもしれないが、片陰を選びながら猫が立ち去っていく姿を、このように自然体に表示したところが良い。「老猫」は「老人」を連想させ易いので、年齢不詳の「白猫」の方が無難かも知れない。

夕焼に竹藪暗く沈みゆく 眞三

作者は客観写生に徹した句を毎回だされている。ともすれば目にした複数の

句材を一句に盛り込み勝ちであるが、掲句は良く整理されている。あたり一面が夕焼けに照らされている中に竹藪の暗さを発見したのである。明と暗を印象鮮やかに対照させている。「暗く沈む」の表現が良い。

梅雨空を雲大艦隊のごとくゆく 佳史

梅雨の晴間に空を仰ぎ見たとき、大きな雲塊が隊列を組むようにして一方向に進んでいく。作者はこれを大艦隊と見てとった。大艦巨砲方式を重視した日本海軍が、艦載機による空中戦を重視した米国海軍に敗退し、日本が全面降伏した八月の空はどのようなようであったのであろうか。中七部分が九音であるから、下五と合わせて整理すれば、次のようにすることもできる。

梅雨雲の大艦隊のゆくごとく

電線の影一直線に燃えにけり ヤエ子

作者の目は空中に架けられた電線そのものではなく、路面にくっきり写った電線の影に向けられている。物理的には「影が燃えること」はあり得ないことであるが、正面切って影が燃えていると断言されれば、頷くほかはない。影が投影されている路面も燃えているのであるから、そのような受け止め方には、無理や誇張はない。

飯饅えし臭ひかすかに中華街 守

#### 【自句自解】

華やかさの裏にあるものを敢えて詠むことによって、総体としての当該事象が何であるのか、その本質に迫りたかった。

尚、瀬戸溪水さんより一週間遅れの不在投句がありましたが、選考の対象外としました。

文責 副代表 増田 守

(事務局より)

夏季通信句会を実施します。

句数は夏に属する季語を用いた三句です。

同封の葉書で、八月十日までにお送りください。